Summa Tarhologica

稲垣足穂大全

II

稲垣足穂大全Ⅱ

定價　貳千圓
發行　一九六九年九月一〇日
著者　稲垣足穂
發行所　株式會社現代思潮社　東京都文京區小日向一―二四―八
電話(九四三)四四〇六(代表)　振替／東京七二四四二
郵便番號　一一二

© Taruho Inagaki

本文印刷　東京創文社
裝本印刷　形成社
製本　橘本製本所
製函　石黒紙器製作所

稲垣足穂大全Ⅱ　目次

つけ髭 2
鼻眼鏡 10
WC 18
Aと円筒 30
ちょいちょい日記 34
菫とヘルメット 46
夢がしゃがんでいる 56
星は北に拱(たんだ)く夜の記 62
きらきら草紙 68
新=犬つれづれ 76
彼等 (THEY) 92
レーディオの歌 114
フェヴァリット 122
かものはし論 142
緑色のハット 150
明治大正少年気質 158
臀見鬼人 174
緑の蔭 194
一 水色のミカヅキ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

二　緑色の文学
三　トア・ロード
四　二壜のソース
五　ウォルフェンデン勧告
ヴァニラとマニラ　230
ジッドの少年愛論　270
バートン男色考からの摘要　296
宮武外骨の『美少年論』　340
第一　罪悪としての男色
第二　男色発生の動機
第三　男色の特徴
第四　男色関係の双方
第五　女性的傾向
第六　世界的男色（上）
第七　世界的男色（中）
第八　世界的界色（下）
南方熊楠児談義　400
はしがき　浄愛と不浄愛　下淫の例　直江兼続と景勝　松室仲算が仙童を恋した事　大若衆　以呂波文庫及び攻玉塾のこと　孌童　用具　江戸末期のかげま　高野小姓　宿場の男娼茶屋　カゲロフ・カゲマの名義　カゲマヤロフウ・カゲマの子・影子　御座直し　御物　ダチ（達・立）という話　文殊尻　通和散　稚児の谷落し　ちご石　一児二山王　坊（坊や・坊っちゃん）　薬師寺与一のこと　北条氏康と綱成との二重姻戚関係　栗田刑部と時田鶴千代　朝倉景鏡寵童千能丸　亀井宇兵衛と百々仁左衛門　頼卿　思ひざし　雑　NOTE

Summa Tarhologica

つけ髭

少年は、すでに中学生なのに、マッチを擦るのがおッかなくてなりません。まるで発火させるのか、それとも軸木を投げすてるのか、そのどっちだか判らないくらいでした。だから、サムライ同志が衝突して刀を抜くと、もうかお上げてスクリーンを見ていることができませんでした。そのくせ、密集したり馬に跨ったりして現われる一団がパッと散らばって、手に手に夢幻的な白煙をあげる小銃とかピストルとかを射ちはじめると、有頂天になってしまうのです。――こんな少年の頭の片すみに、ふと或る時観たシーンが喚び起されました。

それは山ふところの平地に天幕を張っている騎兵隊が、インディアンの包囲攻撃を受けるところでした。天幕を中心にぐるっと大きな輪形に取りかこんで、走りながら銃火を集注する執拗な乗馬隊に対抗して、バタリバタリたおれて行った兵隊と、そこに危急を告げるように、白煙の裡にひらめいていた星条旗とが、何に云わんかたのない美しさをもって、いまさらに眼の前にえがかれるのでした。しかしその時、少年の心を本当に捉えたのは、その次に映ったほんの短かい場面です。

襲撃のあとです。旗竿や天幕はひき倒され、踏みにじられて、めちゃくちゃになっていました。そして事知らぬげな月に照らされた、――というのは青く着色されたフィルムでしたから――その山腹の平地には、るいるいとして、そう

です、いったい何であるか最初の瞬間は途惑ったくらいの乱雑さにおいて、真裸の、一糸もつけていない兵士の死体が盛上っているのでした。それだとみとめられて、少年は、こんなものが映されてよいのだろうかとおどろきの瞳を張りました。が、さて次には、それら気味悪く積上った柔らかな白いものの、どれがどの部分にあたるのであろうか、手がどうなって、足がいかようにおかれ、胴体とのあいだにどのように繋っているのであろうかと、それぞれ出来るだけ速く見きわめようとする方へ、努力を注いだのでした。真裸の死体はそんなに取乱れ、ごちゃごちゃになっていました。むろん当方は焦り気味で、一方、眼前に瞬きながら映っている情景が余りにこんがらかっているので、見当がつきません。けれどもそのような数秒間がたつと、やっと、そのなまなましい山の一等左のはしにある白いかたまりが、実は、その頭部を他の者の折りかさなりの中へ突ッ込み、したがって全身の三分の二を露出させて、うつ伏せに、ちょうどきゅうくつにお辞儀している恰好になった兵士だ、ということが判りました。スクリーンの青い月夜であっただけに、ナマナマしくきれいな、そのひときはむき出しになっているおしりの曲線が、救援隊出発の場面に変っても、フィルムが終って明るくなった時にも、更に帰り途でも、少年の頭から離れませんでした。

それにしても、せっかく思い出しはしたものの、こんどの題目は、レールに縛りつけられた探偵や、箱詰にされた令嬢や、粉砕した飛行機の下じきになった飛行家や……そんな真似事のように、いくら一人で留守居している時であっても、おいそれと実演できるとは思えないのでした。なぜなら、先のたぐいは云わば心理を働かせるだけでも事は足りますが、こんどは場面を想像して、そしてただきゅうくつにおじぎをしている姿勢をとるだけでは満足でありません。真ッ裸はともかく、少くとも半身は肌を出して、山中の寒い夜気にさらされている感じをともなわせなければ、何にもならないのです。若しそんなへんなことをやっていて、ふいに人がくるけはいがしたら何としよう？——しかし少年は、間もなく、寝床の中では、殊に電灯を消してからは裸になってもよい、ということに気が付きました。そしてその夜さ

っそくにその通りに事が運ばれましたが、何やら物足りません。或る夕暮のこと、階段のよこにはめこまれている姿見に気づきました。山の中腹で月光を浴びて死んでいる兵士の真似は、すでに夜具から匍い出た、つめたい畳の上でも二、三回試みられていました。——少年は、この時刻にはここへは出てこない家人のけはいに耳を澄ませて、大丈夫なことをたしかめると、次には念のために、すぐ向い合った、カンフルの香がただよっている暗い部屋の内部をも、注意してうかがってみました。むろん人がいるわけはなく、只窓ワクの区切る屋外のトワイライトを受けて、室内のニッケルやガラスの器具が物憂く微かに光っているだけです。廊下の、灯がついている所と反対側は、両方にひらく磨ガラスのはまった戸になっていました。この戸が開くためには、その先にある玄関のドアがあく音がするはずですから、身づくろいをする暇は十分にあるわけです。といって、さすがにここで真裸にはなれません。着物をまくし上げて、腰から下だけ裸になり、脱いだものは懐ろにねじこみました。——こうしたならば、あの淋しい、荒れはてた禿山の中腹で全滅して、身につけたものをすっかり剝ぎ取られ、そのまま打っちゃられた兵隊の感覚の半分は味えるかも知れない。少年は床の上に両膝をつくと、手を背中に廻して組んで、前のめりにおしりを突き出し、ちょうどあの、頭に鳥の羽根をつけたインディアンらのために散々おもちゃにされたあげく、そこにおッ放り出されたように、かおをよこにして、どしんと思い切って両肩を床のおもてにぶち当てました。そこはリノリューム張になっていて、したがってその固い敷物特有の冷ややかさが出来るだけからだに伝わるように……と、頬ッぺたも床にすりつけました。そしてどんなふうにこの姿が見えるかを、壁面にはめられた大鏡によってしらべようとしましたが、こんな低い位置では姿見が覗かれないのです。かおを上げて、自分の腰周りからふとももにかけての白さと、そこがあの兵士のような曲線になっているかどうかを辛うじて、——というのは下半身は動かしてはならず、瞬時非常に苦しい姿勢になったからです——あんなふうなカーヴがそこに構成されているかどうかを、やっと見定めてから、再び頬をリノリュームの上におしつけて、からだをもじら

せながら、ふと上方に首をねじました。少年の足元からすぐ曲り階段になっていましたが、その二階の手すりから、かれがじっと見下しているのでした。

ドキッとして動けなくなり、それから自分が真赤になっていることを意識しながら、少年は立上りました。——かれというのは、少年の父の国から出てきて、優等生として此地の医学校で勉強していたのです。ところがことしの春、もう卒業間ぎわになって、——少年はその始終を看護婦からきかされておどろいたのでしたが——よその奥さんといっしょに寝ている所を、急に帰ってきたそこの主人に見つけられました。大騒ぎになって、先方は告訴するといきまき、新聞ダネになるところでしたが、少年のお父さんらがやっとおさえたのでした。かれはしかし退校処分を受け、復校運動がうまく運ぶまでという名目で、少年の家で目下謹慎中の身分なのでした。二年ばかり前までは、折々遊びにやってくるかれと公園や活動などへ出かけたことがありますが、そのころは未だ少年も幼かったし、よく判らないことの方が多かったのです。そして印象といえば、口数の少ない、指先がいつも磨いたようにきれいな、格別好きでもまたきらいでもない人になっていました。けれどもこのたびかおを合せた時は、何だかきまり悪く、かれだって二階に引きこもりがちでしたから、少年は極くまれにその部屋へ行って、顕微鏡で、色のついた奇妙奇天烈なかけらを覗いたり、コバルト色や褐色の、共口の小壜を貰ったりするくらいのものでした。

それにしてもかれは階段を下りようとしていたのでしょう。先刻からあんなにきまりの悪い、弁解の仕様もない自分の仕ぐさをじっと見ていたのです。少年は当惑して泣き出したくなりました。いっそ逃げようかとも思いました。といって、そんな一時逃れをやったところで何にもなりませんし、事はよけいに縺れるでしょう。立ち上ったはずみに、その時少し笑っていたかれを見上げて、自分も笑いながら、階段を登って行きました。おのずからそんな動作になってしまったのです。だってその他にどんな方法が採られましょうか。少年はかれのわきを素通りして、トットッとかれの部

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

屋へ先にはいってしまいました。

マホガニーの机上には青い傘のついたスタンドが点って、分厚い独逸語の書物の上にまるい影が落されていました。少年は机に寄りそって坐ると、本のページにある紅と青の色彩がついた解剖図を、我にもあらぬ心持で見つめていました。それは、数刻前の状態を受けつぐ、どうしていいか判らぬ気まずい数分間でした。少年の脳裡には、思いがけない昔のことが喚び出され、直ぐ次のものと入れ代ったりしていました。ちょっとあきれたふうをして階段の降り口に佇んでいたかれは、しばらくして部屋へ戻ってくると、そばにならんで坐りました。それから少年の肩先に、いやに柔かい手をかけました。

「面白い？」

「何――これ？」

少年は云いましたが、その声はかすれています。

「どうしたの」

かれはそう云いながら向きを変えて、少年を抱き寄せました。そして何事でもないように頬擦りして、それからかおを覗き込むようにして、両手で挟んで自分の方へねじ向けると、くちびるを吸いました。少年が何ともできずにいると、階段の下から看護婦の呼び声がしました。青年はハーイと元気な返事をしましたが、下りて行くまえに、久留米絣の袂の袖で素早く少年の脣を拭いました。二階にひとり取残された少年は、これで関所は抜けたという安堵を覚えましたが、同時に、机の上の小さい円鏡のおもてに映っている自分のかおが、その両方のまぶたがきつく二重になっていることに気が付きました。そしてどんなに瞬きしても、指でこすっても、元通りになりそうもないので、別な、新らしい心配が湧きはじめていました。

二階から音もなしに下りてきたかれが、姉の鏡台から刷毛を取出して、粉白粉をいっぱいくッつけて、少年の頬を叩いたのは、あれから一週間ほど経った夜のことでした。その時少年は、うしろに懸けてあったボーイスカウトの服が外され、それと着換えるように命じられたことにたいしても、階段の中途や廊下のまがりかどでつかまえられた時のように、青年のする通りに、かれの云うように、したがうのほかはありませんでした。というのは、あの最初の夜、少年をうしろ抱きに両膝の上に載っけたかれは、次の日は少年を差し向いに膝にのせ、更に翌日には同様な仕ぐさが畳の上に寝ころびながら為されて、少年はすでに自分の方からくちびるを突き出して、笑いかけるようになっていたからです。そんな或る時でした。ハッと二人は坐り直しましたから、相手は只瞬時へんなかおしていただけであるとは云いながら、階段の上にやにわに足音がして、かれの学友がはいってきたことがあります。また、かれが少年を両手に抱き上げたまま階段を下りて行ったとき、腕の中でハラハラしている少年の気遣いどおりに、薬局のドアから、ひょっくりと白いかおが出て、

「まあ、みなさんがお留守だと思ったら何をしていらっしゃるの」

と云いかけたこともあります。

しかし青年は落付き払って、

「お嬢さんだったらたいへんだね」

そう云いすてたまま、構わずどしんどしんと下りて、洗面所の前まで行ってから、少年を下しました。——ちょうど場所がよかったから、かれの手が当っていた箇所は電灯の影になって、看護婦には気付かれなかったはずです。

少年の方では、学校から帰ってくるなり二階へ上って、夏の日のような裸になってしまったことがあります。それなのに、かれはただ角力を取ろうかと云ったまま立上ろうともしなかったので、もう二階へはやってこまいとさえ少年は

思いました。こんな暗黙の遊戯が二人のあいだに進行して、一週間後のみんなが留守の晩、かれに云いつけられたとおり、ボーイスカウトの制服に着換えねばならなかった少年の前には、すっかり忘れていた、あの、きまりの悪い当初の晩の件が持ち出されたではありませんか。

――が、階段の上から見ていただけの人にとって、その仕ぐさが何事を意味していたかは判っていないはずです。ただ二階へ行くなり、ここへ射たれたように倒れてごらん、と云われて少年はぎくりとしたのです。けれどもかれはもう少年を抱きかかえて、その場へうつ伏せに寝転ばせました。そして両の膝を立てさせて、先夜自分が階段の下に見たのと同じ姿勢にしました。卓上の電球はいち早く天井につけ換えられ、青いシェードがあべこべにかむせてありましたから、この六畳じゅうには恰も舞台面の夜景のように、青い、ほのぐらい光が漲っていました。かれは更に玄関わきの履物箱の中から靴を持ってきて、少年にはかせて、自身の手で叮寧にヒモを結びました。かれ自身といえば、空色に赤すじ入りのどこか外国の軍服をまとうて、ぴかぴかした赤革の長靴を穿いていました。おまけにかたえにほうり出されていた、ヘルメット帽まで取上げたのでした。それはてっぺんに短かい槍のついた正銘品でした。このめずらしい品物は、近ごろ独逸から帰ってきた友人のみやげだと云って、かれが持っているもので、この鬼の頭のようなものをかむって夜遅く帰ってきた時、玄関口をあけた看護婦が、鼻の先にぬっと突立っていた異形の人影に仰天して、ピシャン！ と泡をくって戸を閉めたことによって、評判の代物になっていました。けれどもそのヘルメットに合せて、こんな軍服やサーベルまで取揃えているのは、いつどこでどうしたものやら、少年にはてんで見当がつかないのでした。只そんなよそおいをして青い光の下に突立ったかれは、よく似合って、本当の外国士官のように見え出していました。それと共に、こんな普段とは異った改まった雰囲気を前に、もう止そうかという不安を覚えていた少年自身にも、だれか自分ではない他の者が、こんなふしぎな遊びをやり始めているかのような気がしてきました。この遊戯がどう運ばれるのか、終り

まで見ていたいという好奇心が、別に湧き上ってくるのでした。

「お月様の光が当っている北仏戦線の堤に少年義勇兵が倒れています。頭の上にはサーチライトの縞が入れ違って、そこらじゅうには榴散弾の白煙が立昇っていますが、それは花火を使わないことにはダメです。いつか研究してやってみましょうよ……」

そんな口上を説明者のように述べて、ハンカチで少年に目隠しをしてからも、ヘルメットの士官は、少年の帽子を外したり、冠せたり、あご紐を下して外れかかっているように直したり、ネッカチーフを引っぱったり、靴先をねじらせたり、股をもう少うし開かせたり、おしりをもっと突き出すように腰を持ち上げたり……まるで乱暴な体格検査のように諸々方々をいじくり廻しました。そしていったん遠退いて、かなり永いあいだ、じッとそのままにしている少年の方を眺めているけはいでしたが、やがてがちゃがちゃいうサーベルと長靴のきしむ音が、部屋のそと、たぶん階段の途中辺りに起って、それが匍い寄るような忍びやかさで再び迫ってくると、ドキドキと速い左胸の音をきいている少年の肩にぐッと頑丈な靴先が当って、そこをゆっくりと、しかし蹴るように押したので、きゃしゃなからだは横の方へ転がりました。それから上向きになりました。半ズボンの股に相手の膝がしらが差し入れられて、革と羅紗とが入りまじった兵隊の匂いがおおいかぶさってくると同時に、肩の下へ片腕が廻されました。抱き上げられた十四歳の花嫁は、少し顫えながらも、本当に人事不省になった少年兵のようにぐったりしていました。けれども、青い電気の月をまぶたに覚えて、締めつけられながら、嗅ぐように足の方から上ってきた敵国将校の接吻を脣の上に感じた時、この上にあるもしゃもしゃしたものは最初からついていたか知ら？　ということにも、ちょっとの間考えを向けずにおられませんでした。

鼻眼鏡

その頃、私は舞子から、神戸の東郊にある中学校へ汽車通学をしていました。K・Yという下級生も同様に、これはステーションを二つ置いて神戸に近い須磨から、通っていたのです。

K・Yを初めて知ったのは、私が三年生になった春の終りのことでした。帰りの汽車にひとり乗っていた時で、鷹取駅を発車すると、幸い乗客が少ないので私はポケットにバットの小箱を探って、然し一応左右に眼をくばる為に立ち上ると、うしろから、

I hear their
gentle voices
calling Old Black Joe

英語の唱歌がきこえたのでした。それは発音を辿りながらうたっているのですが、節廻しがなかなか上手で、小さな声がそれこそ gentle voice なのです。で、そっと覗いてみると、私とは背合せの腰掛からすべり落ち相な、殆んどあおむけの姿勢になって、私の学校の制服をつけた少年が、胸の上に、紫リボンのたれた唱歌帳をひろげているのでした窓枠から射し込む日光を受けたその首すじが、ちょっとめずらしい品のよさに置かれていました。同じ汽車組の中にこ

んな新入生がいたことはついぞ知らなかったものですから、どんな顔立であろうと、私は、もっとからだを伸ばしました。このとたん急にうしろを向いた相手の眼と衝突して、二人は双方から笑い合いましたが、すると少年は、あわてて唱歌帳を、かたえに置いてあった教科書の白い包みの下に敷いてしまいました。次のステーションで下りた少年の後ろ姿を、私は、車窓からやや感心して見送っていました。何故なら、彼のきれいに剃られている耳の上から、真白なカラー、折目のついたズボン、磨きのかかった靴、何処にも非のうちどころとては無かったからです。いくら家がやかましくても、一年生やそこいらでこんなにきちんとしているのは、きっと本人の趣味に依るのだろうな、と私は考えてみました。が、もっと気を惹かれたのは、彼のおとがいすぼりの顔が、学校のうしろの、ポプラに囲まれたカナディアンスクールの生徒のように白くて、薇薔色の脣を持っていたことです。それに、まつげの長い眼と眼とのあいだが、なんだかややッこしく、クシャクシャとなっていて、ちょうど鼻眼鏡をかけているような印象を与えました。

次の朝、登校の汽車が学校下のステーションに着いた時、昨日の混血児のような少年を、彼の仲間がどう云って呼ぶであろうかと注意していると、同級生らしいのっぽの生徒が、いましも改札口を出ようとしている例の少年の背後から、「ハイカラー!」と呶鳴りました。

その「ハイカラー」に、私はまた二、三日経った帰りのステーションで出くわせました。彼はプラットフォームのベンチに腰かけて、多分この日何かの用事で連れ立っている、彼の家の書生だと受取れる人物に向って、何やら小声で話していました。それが書生によく通じないらしく、「何?」「何?」ときき返すと、その坊っちゃんは、傍らにいる学友仲間を憚るように、ベンチから立ち上って、私の方へ歩いてきながら、腰をかがめている書生の耳元で、気まりわるそうに何事か小声で繰り返していました。こんな情景は、程なく汽車がやってきたのを合図に、私をして先日の背高の級友をつかまえて、少年の名前を問わせずに置きませんでした。K・Yという名を教えてくれたクラスメートは、つけ加

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com